V. HOPE プロジェクト

日本学術振興会先端研究拠点事業 HOPE

2004年2月1日から、日本学術振興会先端研究拠点事業として、HOPEプロジェクト(「人間の進化の霊長類的起源」の研究)が始まった。先端研究拠点事業は、我が国と複数の学術先進諸国における先端研究拠点間の交流を促進することにより、国際的な先端研究ネットワークを構築し、戦略的共同研究体制を運営するものである。HOPEプロジェクトは、平成18年度より事業計画を「国際戦略型」に移行し、平成19年度も引き続き、より活発な国際共同研究システムとして機能している。

1. 先端研究拠点事業 HOPE の事業計画

独立行政法人・日本学術振興会(JSPS)は、学術の国際交流に関する諸事業の一環として、我が国において重点的に研究すべき先端分野における、我が国と複数の学術先進諸国の中核的研究拠点をつなぐ持続的な協力関係を確立することにより、21世紀の国際的な先端研究ネットワークを形成、それを戦略的に運営することを目的とした事業を平成15年秋に開始した。これが先端研究拠点事業と呼ばれるものである。対象分野は、我が国の各学術領域において先端的と認められる分野であり、かつ、交流相手国においても先端的と認められている分野である。尚、共同事業の対象国は、米国、カナダ、オーストリア、ベルギー、フィンランド、フランス、ドイツ、イタリア、オランダ、スペイン、スウェーデン、スイス、英国、オーストラリア、ニュージーランドの15ヶ国に限定されている。京都大学霊長類研究所とマックスプランク進化人類学研究所の共同事業であるHOPEプロジェクトが、その第1号に選ばれた。

HOPE事業は、霊長類研究所の観点から言えば、文部科学省(当時文部省)のCOE拠点形成事業(竹中修代表、平成10-14年度)の基礎のうえにたって、後継の21世紀COEプログラム(平成14-18年度)と連動して、先人の努力を後継発展するものと位置づけられる。こうした国際的研究拠点の創出は、中期計画・中期目標(平成16-21年度)にそって全所的に取り組む課題と認識されている。そのため、事業の採択通知を受けて、所内に「HOPE事業推進委員会」を発足して、「事業計画の指針」を検討立案し、協議委員会に報告して了承された。

その指針に基づき、「拠点形成促進型」(平成16年度から17年度)を終了した。そして、平成18年度より事業計画を「国際戦略型」へ移行し、平成19年度も引き続き国際集会の開催に力を入れつつ、以下の事業をおこなった。

1) 共同研究事業の実施

共同研究(野外研究を含む)の実施を通じて、「心」「体」「社会」「ゲノム」という4つの視点・領域から、人間の本性の霊長類的起源を探り、先端的な研究領域を開拓することを第一の目的としている。国際的共同研究の実施打ち合わせならびにその予備調査をおこなう。共同研究のために若手研究者を長期に派遣及び招聘す

る。研究基盤としての海外研究拠点の形成・育成を図る。また、人材の有効な交流のため、日本人若手研究者の国際学会での発表や情報交換、ポスドクならびに大学院生等の若手研究者の海外での研究成果発表を支援している。

全視点・全領域にわたり、国外拠点と共同研究を進める途上国を含めた世界各国の研究陣との有効な情報交換を進め、研究成果に結びつけることを目標にして事業を推進している。

2) セミナー・国際集会事業の実施

共同研究の成果発表や情報交換のためのセミナー・レクチャー・ワークショップ・シンポジウム等を企画実行する。開催地は国内外を問わない。他の事業・企画と連携して、我が国における研究拠点としての役割を果たす。こうした国際集会のための海外渡航費用を支援する。平成19年度も海外から各研究分野における著名な研究者を招き、研究交流を行った。ひとつはエモリー大学のフランス・ドゥバル博士によるセミナーを開催し、類人猿とヒトに共通する「共感」を切り口にヒトの「心のアイデンティティがいかにか進化し、発生してくるか」を検討した成果を議論した。また、クイーンズ大学のニコラス・トロエ博士とともにセミナーを開催し、生物運動の検出・認識についての最新の議論を交わすことができた。さらにロンドン大学のニコラス・ハンフリー博士とのセミナーでは、サルからヒトへの進化過程を比較進化心理学的に考察し、抽象性を操る能力や言語の起源を議論した。

3) 若手向けプログラムの実施

HOPEは本体事業とは別に行われる若手向けプログラム開催事業を運営している。これは国内外から講演者を招き、おもにフロアの若手を対象に議論を進めるという集会を開催する事業である。平成19年度は、東京において11月18日(SAGAとの共催) - 19日に、シンポジウム2007「人間の進化の霊長類的起源」を開催。両日あわせて約300名の参加者があり、若手研究者との有意義な交流の場となった。平成20年度も11月に東京にて開催する予定。

4) 出版・ネットワーク関連事業

すでに霊長類研究所に常置されているHOPEホームページは国内外の霊長類研究の情報発信の機軸として機能し、多くの利用者に親しまれている。また、例年数十件の原著論文、総説など、研究成果の出版が進んでいる。平成19年度はHOPEのひとつの成果として、ベトナムの野生哺乳種の分布をまとめた研究書500冊を出版し、関連研究機関の研究者へ配布した。

2. HOPE の組織

HOPEの事業を推進するために、研究所内にHOPE事業推進委員会を設けている。毎月1回定期的に委員会を開催して、事業の進行具合を検討し、事業の立案の作業をおこない、提案された事業の審査などをおこなって

いる。各年度の事業委員会の構成は以下のとおりである。

<平成15年度>

松沢哲郎, 茂原信生, 竹中修, 上原重男, 松林清明, 渡辺邦夫

<平成16年度>

松沢哲郎, 茂原信生, 竹中修, マイケル・ハフマン, 景山節

<平成17年度>

松沢哲郎, 茂原信生, 林基治, マイケル・ハフマン, 景山節, 橋本千絵, 平井啓久, 遠藤秀紀

<平成18年度>

遠藤秀紀, 景山節, マイケル・ハフマン, 橋本千絵, 林基治, 平井啓久, 松井智子, 松沢哲郎

<平成19年度>

遠藤秀紀, 景山節, マイケル・ハフマン, 橋本千絵, 林基治, 平井啓久, 松井智子, 松沢哲郎

<平成20年度>

橋本千絵, 景山節, マイケル・ハフマン, 林基治, 平井啓久, 松井智子, 松沢哲郎

なお、研究拠点内協力者は、本研究所の教員すべてとした。なお、先端研究拠点事業の特色として、中核機関である霊長類研究所の外部の研究者、「拠点外協力者」との協力連携が要請されている。HOPE事業を推進する組織を、おおまかな研究対象ごとに4区分して班を構成した。「心、身体、社会、ゲノム」の4班である。それぞれの班にかかわる拠点外協力者を下記の方々に委嘱してきた。

<「心」研究班>

長谷川寿一(東大), 藤田和生(京大・文), 入来篤史(東京医科歯科大)

<「身体」研究班>

諏訪元(東大), 中務真人(京大・理)

<「社会」研究班>

山極寿一(京大・理), 山越言(京大・アジア・アフリカ地域研究研究科)

<「ゲノム」研究班>

藤山秋佐夫(情報学研究所), 斉藤成也(遺伝学研究所), 村山美穂(岐阜大)

提携する海外の中核的研究拠点は以下のとおり。まずドイツについては、平成15年度末に日本学術振興会<小野元之理事長>とマックスプランク協会<ピーター・グルス理事長>のあいだで交わされた協定書をもとに、京都大学霊長類研究所とマックスプランク進化人類学研究所が共同しておこなう事業と位置づけられた。平成16年度には、米国のハーバード大学人類学部を米国の中核的研究拠点として日独米の3か国での提携を始めた。平成18年度より新たに提携したイタリアの認知科学工学研究所とイギリスのケンブリッジ大学とも、平成19年度も引き続き研究提携を進めている。

それぞれの国の中核機関とその研究協力者は以下の

とおりである。

ドイツ、マックスプランク進化人類学研究所(平成15年度発足)

Max Plank Institute for Evolutionary Anthropology (MPIEVA)

Michael Tomasello, Department of Developmental and Comparative Psychology

Christophe Boesch, Department of Primatology

Svante Paabo, Department of Evolutionary Genetics

Jean-Jacques Hublin, Department of Human Evolution

アメリカ、ハーバード大学人類学部(平成16年度発足)

Department of Anthropology, Harvard University

Richard Wrangham, Primatology

Daniel Lieberman, Skeletal Biology

Marc Hauser, Primate Cognition

David Pilbeam, Paleoanthropology

イタリア、認知科学技術研究所(平成18年度発足)

Institute for Science and Technology of Cognition

ISTC-Consiglio Nazionale delle Ricerche (CNR)

Elisabetta Visalberghi

Giovanna Spinozzi

Patrizia Poti

Giacomo Rizzolatti (Parma University, Istituto di Fisiologia Umana)

イギリス、ケンブリッジ大学生物人類学部(平成18年度発足)

Department of Biological Anthropology, University of Cambridge

William McGrew

Nicola Clayton, Department of Psychology, University of Cambridge

Nathan Emery, Department of Psychology, University of Cambridge

Alex Kacelnik, Department of Zoology, University of Oxford

Dora Biro, Department of Zoology, University of Oxford

Andrew Whiten, St. Andrews University

Richard Byrne, St. Andrews University

James Anderson, Stirling University

3. HOPE プロジェクトの概要

人間の心も体も社会も、進化の産物である。「われわれはどこから来たのか」「人間の本性とは何か」、そうした根源的な問いに答えるためには、人間がどのように進化してきたのかを知る必要がある。生物としての人間は、脊椎動物の一種であり、哺乳類の一種であり、その中でも「霊長類」と呼ばれる「サル仲間」の一種である。では人間は、他のサル類と何が同じでどこが違うのか、本プロジェクトHOPEは、人間と最も近縁な人間以外の霊長類に焦点をあてて、人間の進化の霊長類的起源(Primate Origins of Human Evolution)を探ることを目的としている。HOPEは、その英文題目のアナグラム(頭文字を並べ替えたもの)であると同時に、野生保全への願いも込められている。人間を除くすべての霊長類は、いわゆるワシントン条約で「絶滅危惧種」に指定されている。先端的な科学研究を展開すると同時に、「進化の隣人」ともいえるサル類をシンボルとして、地球環境全体ないし生物多様性の保全に向けた努力が今

いる。各年度の事業委員会の構成は以下のとおりである。

<平成15年度>

松沢哲郎, 茂原信生, 竹中修, 上原重男, 松林清明, 渡辺邦夫

<平成16年度>

松沢哲郎, 茂原信生, 竹中修, マイケル・ハフマン, 景山節

<平成17年度>

松沢哲郎, 茂原信生, 林基治, マイケル・ハフマン, 景山節, 橋本千絵, 平井啓久, 遠藤秀紀

<平成18年度>

遠藤秀紀, 景山節, マイケル・ハフマン, 橋本千絵, 林基治, 平井啓久, 松井智子, 松沢哲郎

<平成19年度>

遠藤秀紀, 景山節, マイケル・ハフマン, 橋本千絵, 林基治, 平井啓久, 松井智子, 松沢哲郎

<平成20年度>

橋本千絵, 景山節, マイケル・ハフマン, 林基治, 平井啓久, 松井智子, 松沢哲郎

なお、研究拠点内協力者は、本研究所の教員すべてとした。なお、先端研究拠点事業の特色として、中核機関である霊長類研究所の外部の研究者、「拠点外協力者」との協力連携が要請されている。HOPE事業を推進する組織を、おおまかな研究対象ごとに4区分して班を構成した。「心、身体、社会、ゲノム」の4班である。それぞれの班にかかわる拠点外協力者を下記の方々に委嘱してきた。

<「心」研究班>

長谷川寿一(東大), 藤田和生(京大・文), 入来篤史(東京医科歯科大)

<「身体」研究班>

諏訪元(東大), 中務真人(京大・理)

<「社会」研究班>

山極寿一(京大・理), 山越言(京大・アジア・アフリカ地域研究研究科)

<「ゲノム」研究班>

藤山秋佐夫(情報学研究所), 斉藤成也(遺伝学研究所), 村山美穂(岐阜大)

提携する海外の中核的研究拠点は以下のとおり。まずドイツについては、平成15年度末に日本学術振興会<小野元之理事長>とマックスプランク協会<ピーター・グルス理事長>のあいだで交わされた協定書をもとに、京都大学霊長類研究所とマックスプランク進化人類学研究所が共同しておこなう事業と位置づけられた。平成16年度には、米国のハーバード大学人類学部を米国の中核的研究拠点として日独米の3か国での提携を始めた。平成18年度より新たに提携したイタリアの認知科学工学研究所とイギリスのケンブリッジ大学とも、平成19年度も引き続き研究提携を進めている。

それぞれの国の中核機関とその研究協力者は以下の

とおりである。

ドイツ、マックスプランク進化人類学研究所(平成15年度発足)

Max Plank Institute for Evolutionary Anthropology (MPIEVA)

Michael Tomasello, Department of Developmental and Comparative Psychology

Christophe Boesch, Department of Primatology

Svante Paabo, Department of Evolutionary Genetics

Jean-Jacques Hublin, Department of Human Evolution

アメリカ、ハーバード大学人類学部(平成16年度発足)

Department of Anthropology, Harvard University

Richard Wrangham, Primatology

Daniel Lieberman, Skeletal Biology

Marc Hauser, Primate Cognition

David Pilbeam, Paleoanthropology

イタリア、認知科学技術研究所(平成18年度発足)

Institute for Science and Technology of Cognition

ISTC-Consiglio Nazionale delle Ricerche (CNR)

Elisabetta Visalberghi

Giovanna Spinozzi

Patrizia Poti

Giacomo Rizzolatti (Parma University, Istituto di Fisiologia Umana)

イギリス、ケンブリッジ大学生物人類学部(平成18年度発足)

Department of Biological Anthropology, University of Cambridge

William McGrew

Nicola Clayton, Department of Psychology, University of Cambridge

Nathan Emery, Department of Psychology, University of Cambridge

Alex Kacelnik, Department of Zoology, University of Oxford

Dora Biro, Department of Zoology, University of Oxford

Andrew Whiten, St. Andrews University

Richard Byrne, St. Andrews University

James Anderson, Stirling University

3. HOPE プロジェクトの概要

人間の心も体も社会も、進化の産物である。「われわれはどこから来たのか」「人間の本性とは何か」、そうした根源的な問いに答えるためには、人間がどのように進化してきたのかを知る必要がある。生物としての人間は、脊椎動物の一種であり、哺乳類の一種であり、その中でも「霊長類」と呼ばれる「サル仲間」の一種である。では人間は、他のサル類と何が同じでどこが違うのか、本プロジェクトHOPEは、人間と最も近縁な人間以外の霊長類に焦点をあてて、人間の進化の霊長類的起源(Primate Origins of Human Evolution)を探ることを目的としている。HOPEは、その英文題目のアナグラム(頭文字を並べ替えたもの)であると同時に、野生保全への願いも込められている。人間を除くすべての霊長類は、いわゆるワシントン条約で「絶滅危惧種」に指定されている。先端的な科学研究を展開すると同時に、「進化の隣人」ともいえるサル類をシンボルとして、地球環境全体ないし生物多様性の保全に向けた努力が今

こそ必要だろう。

日本は、先進諸国の中で唯一サルがすむ国である。そうした自然・文化の背景を活かし、霊長類の研究では、世界に先駆けてユニークな成果をあげ発信してきた。今西錦司(1902-1992)ら京都大学の研究者が野生ニホンザルの社会の研究を始めたのは1948年である。霊長類研究所(略称KUPRI)が幸島で継続しているサルの研究は60年目を迎えつつあり、9世代にわたる「サルの国の歴史」が紡ぎだされている。さらに1958年に開始したアフリカでの野生大型類人猿調査を継承し、国内外でチンパンジーの研究を発展させてきた。また、日本が創始した英文学術雑誌「プリマーテス」は、2003年からはドイツのシュプリンガー社から出版されるようになったが、現存する世界で最も古い霊長類学の学術誌である。一方、ドイツは、霊長類研究において、ウォルフガング・ケーラー(1887-1967)によるチンパンジーの知性に関する研究をはじめ長い伝統を有している。とくに、1997年にマックスプランク進化人類学研究所(略称MPIEVA)が創設され、類人猿を主たる対象にして人間の進化的理解をめざす「進化人類学」的研究が急速に興隆し、この分野における西洋の研究拠点になっている。アメリカについては、ハーバード大学を始め、霊長類学の多方面で多数の研究者が活躍していることは指摘するまでもない。

HOPEプロジェクトは、それぞれの国の中核的研究拠点とそれに協力する共同研究者が、ヒトを含めた霊長類を対象に、その心と体と社会と、さらにその基盤にあるゲノムについて研究するものである。研究拠点間の国際的な協力のもと、霊長類に関する多様な研究分野が相互交流によってさらに活性化し、「人間の進化の霊長類的起源」に関する新たな知見の蓄積と研究領域の創造をめざしている。「人間はどこから来たのか」「人間とは何か」という究極的な問いに対する答えを探す学際的な共同作業だともいえる。そうした基礎的な研究こそが、「人間はどこへ行くのか」という、現代社会が抱える諸問題に対する生物学的な指針を与えることになるだろう。

そのために、生息地での野生霊長類の野外研究を含めた共同研究の実施、若手研究者の交流と育成、国際ワークショップ・シンポジウム等の開催をおこなう。また、インターネット・サイトならびにデータベースの充実や、出版活動(とくに英文書籍による研究成果の出版シリーズの発足)を通じて、その研究成果の普及・啓発に努める。以上がHOPEプロジェクトのめざす事業である。

HOPEの財務であるが、およそ2500万円規模の事業が例年実施可能となっている。事業の主旨により、外国渡航旅費がほとんどすべてを占める。例年30件から65件の支援事業を実施している。HOPEプロジェクトは平成16年2月に発足、同年3月に京都で実施した国際集会により、日独米のコーチェアが一堂に会して、京都大学霊長類研究所(KUPRI)とマックスプランク進化人類学研究所(MPIEVA)とハーバード大学人類学部(HUDA)とのあいだの共同事業の基礎固めをおこない、交流を本格的に開始している。

過去の実施事業を総括してみると、ドイツのマックスプランク進化人類学研究所のマイケル・トマセロ所長をはじめとする認知発達科学の研究グループと共同し

て、人間の認知機能の発達とその進化的基盤に関する研究をおこなった。ドイツ側がおもに社会的知性の側面を担当し、日本側はおもに道具的知性の側面を担当した。また、マックスプランク進化人類学研究所の比較ゲノム研究部門と共同研究をおこなった。さらに、言語や認知ともからむ形態・化石資料についての情報交換をおこなった。アメリカの拠点であるハーバード大学人類学部を加えた3者で、おもに大型類人猿の野外調査をおこなった。チンパンジーについて、アフリカの東部・中央部・西部の生息域に焦点を絞って研究を重ねた。また、日本側からとりわけ強く推進した研究交流として、ザイルでの野生ボノボの野外研究と、ボルネオの野生オランウータンの野外研究がある。これらの種と地域に関しては深く研究を推進し、その生態と社会についての新たな知見を加えた。

HOPEプロジェクトの参加希望者は年々増加し、平成19年度は、海外派遣、若手長期海外派遣、シンポジウムへの招聘を併せて65件の渡航事業を支援することができた。派遣国は20カ国以上に及び、研究者交流と現地調査を精力的に進めることができた。多国籍交流を包含した野外現地調査や現地での標本資料の検討が効果的に推進されている。欧米諸国のみならず、ベトナム、マレーシア、ラオスなど、これまで調査の遅れていた国々へも調査渡航が行われ、現地において海外先進国との綿密な交流が進められている。また、多くの渡航プランが若手研究者を海外の集いや調査地に派遣することを目的としてきたため、実際の人的交流やフィールドワークを通じての若手研究者養成に関して、最大の成果を上げることができた。一例を挙げると平成19年11月にアメリカのサンディエゴで開催された北米神経科学会において研究発表を行う若手研究者らの渡航支援を行った。この会議は世界各地からの研究者約3万人が集まる大規模な学会であり、参加した若手研究者たちにとって、世界中の関連研究者との交流を深める好機となった。若手は未来の研究活動に実際に貢献する人材であり、その国際的養成を本計画のもっとも重要な研究教育プランとして位置づけたことが、機能したと評価できる。

さらに、国際学術情報の収集、SAGAシンポジウム、国際ヒトゲノム会議、霊長類研究所国際セミナーや会合を通じ、多領域の研究者と学術研究および教育に関する情報の交換を達成することができた。平成19年度の若手研究者対象プログラムでは、国内外の優秀な大学院生や若手研究者とともに、世界第一線の研究陣による最新の研究成果を発表する機会とした。プログラムには、HOPEが扱う主要な領域を網羅できる17の演題が用意された。会場には多数の大学院生や若手研究者の姿が見られ、熱気漂う会場で討論や意見交換が進められた。アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリアから来日した3氏によるチンパンジーの管理戦略、フローレンス大学のロスコー・スタニオン氏によるマカク細胞遺伝学、南イリノイ大学アルリッチ・レイチャード氏によるテナガザルの社会性に関する話題など、演題は日本国内では接することのできない先進的研究内容を含み、また、フィールド研究と実験系を巧みに融合した実例であった。若手研究者にとってこれらの演題を議論できたことは、非常に意義深かったといえる。

以上のように、人的交流を発展させながら、テーマを学際的に研究するというシステムが有効であることを、HOPE 事業は証明することができている。そのため、HOPE のような研究組織間の人的交流を中心として研究遂行が、今後の学術施策の中で重要なものとされることは間違いない。大型機器や施設の導入のみならず、人と人が会い、次世代を育てつつ研究する仕組みづくりの、典型的な事例といえるだろう。

4. 平成 19 年度の各事業とその概要

平成 19 年度の各事業内容を以下に列挙する。なお、各事業の詳細については、HOPE 事業のインターネット・サイト上で、和文・英文の双方で報告しているので参照されたい。http://www.pri.kyoto-u.ac.jp/HOPE/

2007 年度参加者一覧

事業番号 1, 派遣 (若手交流)

Zhang Peng (京大霊長類研・大学院生 DC)
Grooming relations within one-male harem of the Sichuan snub-nosed monkey (*Rhinopithecus roxellana*) in their natural habitat.
中国
2007 年 9 月 8 日～10 月 30 日
2007 年 12 月 22 日～2008 年 1 月 20 日

事業番号 2, 派遣 (若手交流)

JAMAN, Mohammad Firoj (京大霊長類研・大学院生 DC)
A Socio-ecological study on Rhesus Macaque (*Macaca mulatta*): Comparison of Behavioral Activity across Different Environmental Conditions and Food Availability
バングラディッシュ
2007 年 9 月 4 日～10 月 29 日

事業番号 3, 派遣 (共同研究)

押田龍夫 (帯広畜産大学・准教授)
ベトナムにおける樹上性小型哺乳類の分布調査
ベトナム
2008 年 1 月 4 日～1 月 11 日

事業番号 5, 派遣 (共同研究)

林基治 (京大霊長類研・教授)
第 37 回米国神経科学学会出席発表と情報収集
アメリカ
2007 年 11 月 4 日～11 月 8 日

事業番号 6, 派遣 (共同研究)

中務真人 (京都大学理学研究科・准教授)
ウガンダ産化石類人猿の運動適応
ウガンダ, ケニア
2008 年 1 月 13 日～2 月 9 日

事業番号 7, 派遣 (共同研究)

半谷吾郎 (京大霊長類研・准教授)
ダナムバレー森林保護区の霊長類の群集生態学
マレーシア

2007 年 4 月 22 日～5 月 9 日
2007 年 6 月 3 日～12 日
2007 年 7 月 12 日～20 日
2007 年 9 月 11 日～21 日
2007 年 10 月 27 日～11 月 7 日

事業番号 8, 派遣 (共同研究)

Huffman Michael A (京大霊長類研・准教授)
スリランカ霊長類の社会生態学的研究兼野外観察実習とインド南部ボネットモンキーの野外調査
インド, タイ
2007 年 9 月 23 日～10 月 8 日

事業番号 9, 派遣 (若手交流)

Nahallage, Charmalie A.D. (京大霊長類研・大学院生 DC)
スリランカ霊長類の社会生態学的研究兼野外観察実習とインド南部ボネットモンキーの野外調査
インド, タイ
2007 年 9 月 23 日～10 月 9 日

事業番号 10, 派遣 (共同研究)

川島友和 (東京女子医科大学医学部・助教)
心臓自律神経系の形態からみた霊長類の比較進化形態学
オランダ, スイス
2007 年 4 月 20 日～5 月 19 日

事業番号 11, 派遣 (共同研究)

久世濃子 (京大理学研究科・COE 研究員)
原生林に高い密度で生息する野生ボルネオ・オランウータンの生態と社会に関する調査
マレーシア
2007 年 7 月 22 日～9 月 25 日
2007 年 11 月 4 日～12 月 25 日
2008 年 2 月 13 日～3 月 8 日

事業番号 13, 派遣 (若手交流)

西川真理 (京大理学研究科・大学院生 DC)
ボルネオ島に生息する霊長類の調査地見学, 及びニホンザルとの比較研究の検討
マレーシア
2007 年 6 月 3 日～6 月 18 日

事業番号 14, 派遣 (共同研究)

大石高生 (京大霊長類研・准教授)
第 37 回北米神経科学学会大会参加, 発表
アメリカ
2007 年 11 月 3 日～11 月 10 日

事業番号 15, 派遣 (若手交流)

松田一希 (北海道大学地球環境科学研究科・院生 DC)
マレーシア・サバ州におけるテングザルの社会・生態学的研究
マレーシア
2007 年 7 月 18 日～8 月 21 日
2008 年 3 月 9 日～3 月 24 日

事業番号 16, 派遣 (共同研究)

牛田一成 (京都府立大学学術研究科・教授)
大型類人猿の腸内に生息する乳酸菌に関する研究
ギニア
2007年11月4日～11月28日

事業番号 17, 派遣 (共同研究)

池田忠広 (兵庫県立人と自然の博物館・研究員)
東南アジアに生息する現生蛇類骨格の比較形態学的
研究とタイ北部中部中新統 Chiang Muan 産蛇類化石
の古生物学的研究
タイ
2008年3月17日～3月26日

事業番号 18, 派遣 (若手交流)

福地亮 (鹿児島大学 理工学研究科・研究生)
タイにおける哺乳類化石を伴う中新世堆積盆地の堆
積環境と古気候の復元
タイ
2007年6月26日～7月12日

事業番号 19, 派遣 (共同研究)

近藤恵 (お茶の水大学生活科学部・助教)
東アジアのホモ・エレクトスに関する年代学的研究
ドイツ
2008年1月30日～2月6日

事業番号 20, 派遣 (若手交流)

Rizaldi (京大霊長類研・大学院生 DC)
1. SoCHal Development of Aggressive Behavior of
Japanese macaques (*Macaca fuscata fuscata*)
2. Historical changes of distribution of large-sized
mammals and related to the land use trend in Sumatra
Island, Indonesia
アメリカ
2007年4月19日～5月2日

事業番号 21, 派遣 (共同研究)

GARCHA Cecile (京大霊長類研・外国人特別研究員)
SoCHal stress, nutritional state and reproduction in female
Japanese macaques (*Macaca fuscata*)
チェコ, フランス, イギリス
2007年9月2日～9月20日

事業番号 22, 派遣 (若手交流)

中島啓裕 (京都大学理学研究科・院生 DC)
東南アジア熱帯の哺乳類散布型果実における霊長類
の種子散布者としての役割の解明
マレーシア
2007年5月14日～6月14日
2007年7月10日～2008年3月27日

事業番号 23, 派遣 (若手交流)

平井大地 (京大霊長類研・院生 DC)
第37回北米神経科学学会出席および研究成果発表
アメリカ
2007年11月2日～11月9日

事業番号 24, 派遣 (共同研究)

荻野慎太郎 (京大霊長類研・教務補佐員)
ユーラシア大陸北部における鮮新世ウドンガ哺乳
動物相中の食肉類化石の古生物学的研究
ポーランド, ドイツ
2007年7月3日～7月14日

事業番号 25, 派遣 (若手交流)

尾崎麦野 (東京大学理学系研究科・院生 DC)
エチオピア・コンソ遺跡出土有蹄類化石を用いた古生
態学的研究のための比較現生種調査
アメリカ
2007年6月9日～6月23日

事業番号 26, 派遣 (共同研究)

佐々木基樹 (帯広畜産大学・准教授)
ベトナムに生息する小型哺乳類の繁殖生理学的研究
ベトナム
2008年1月4日～1月11日

事業番号 27, 派遣 (若手交流)

服部裕子 (京都大学文学研究科・学振特別研究員)
チンパンジーとフサオマキザルにおける他者の注意
状態の認識と身振りの生成
カナダ
2007年8月14日～8月20日

事業番号 28, 派遣 (共同研究)

國松豊 (京大霊長類研・助教)
東アフリカにおける中新世霊長類の進化と多様性
ケニア
2007年7月21日～9月30日

事業番号 29, 派遣 (共同研究)

清水慶子 (京大霊長類研・助教)
アジア野生動物医学学術集会参加ならびに台北動物
園で共同研究
台湾
2007年8月29日～9月5日

事業番号 30, 派遣 (若手交流)

森本陽 (京都大学文学研究科・院生 DC)
野生フサオマキザルにおける他個体の情動表出への
対応
ブラジル
2008年1月21日～3月23日

事業番号 31, 派遣 (共同研究)

遠藤秀紀 (京大霊長類研・教授)
インドシナおよび台湾における偶蹄目および有鱗目
の咀嚼装置と四肢運動機構に関する比較機能形態学
的解析
ベトナム
2007年9月23日～9月26日

事業番号 32, 派遣 (共同研究)

下岡ゆき子 (京都大学理学研究科・教務補佐員)
野生クモザルの空間分布と音声コミュニケーション

- アメリカ, エクアドル
2007年6月15日～9月18日
- 事業番号 33, 派遣 (共同研究)**
藤田和生 (京都大学文学研究科・教授)
フサオマキザルの道具使用に見られる因果関係の理解
カナダ
2007年8月19日～8月24日
- 事業番号 34, 派遣 (共同研究)**
西村剛 (京大霊長類研・准教授)
頭蓋内部の形態学的特徴を用いた化石霊長類の系統分析に関する研究
フランス
2007年9月26日～10月3日
- 事業番号 35, 派遣 (共同研究)**
三上章允 (京大霊長類研・教授)
第37回北米神経科学会出席ならびに研究情報収集
アメリカ
2007年11月2日～11月9日
- 事業番号 36, 派遣 (若手交流)**
三浦優生 (京大霊長類研・院生 DC)
第10回国際語用論学会大会における研究発表および
ウプサラ大学・乳幼児研究室訪問
スウェーデン
2007年7月9日～7月20日
ドイツ
2007年12月10日～2008年3月3日
- 事業番号 37, 派遣 (共同研究)**
辻川寛 (東北大学医学系研究科・助教)
中期中新世アフリカ産ホミノイドの周辺哺乳類相について研究
ケニア, フランス
2007年10月31日～11月29日
- 事業番号 38, 派遣 (共同研究)**
伊村知子 (京大霊長類研・学振特別研究員)
ヒト, チンパンジー, ニホンザルにおける絵画的奥行き知覚: 選好リーチング課題を用いて
アメリカ
2007年5月7日～5月18日
- 事業番号 39, 派遣 (若手交流)**
檜垣小百合 (京大霊長類研・院生 DC)
第37回北米神経科学会参加, 「閉経にともなうマカクサル海馬のニューロステロイド合成と受容体発現の変化」について研究発表
アメリカ
2007年11月3日～11月9日
- 事業番号 40, 派遣 (若手交流)**
山本亜由美 (京大霊長類研・教務補佐員)
タイワンザルの骨格形態に関する予備調査
台湾
2007年9月15日～9月26日
東南アジアにおけるマカク類頭骨・歯牙の変異
ベトナム, シンガポール
2008年2月24日～3月9日
- 事業番号 41, 派遣 (若手交流)**
金森朝子 (東京工業大学・院生 DC)
野生オランウータンのオスの社会行動に関する研究
マレーシア
2007年6月7日～8月17日
- 事業番号 42, 派遣 (共同研究)**
木村大治 (京大アジア・アフリカ地域研究科・准教授)
コンゴ民主共和国赤道州ワンバ地区における住民の森林利用に関する研究
コンゴ民主共和国
2007年11月3日～12月12日
- 事業番号 43, 派遣 (共同研究)**
松本晶子 (沖縄大学人文学部・准教授)
サバンナヒヒのメスの繁殖同期の解明
アメリカ
2007年12月10日～12月17日
- 事業番号 44, 派遣 (共同研究)**
松原幹 (京大霊長類研・教務補佐員)
ゴリラの遊び行動における環境的・社会的影響に関する研究
イギリス
2008年3月5日～3月31日
- 事業番号 45, 派遣 (若手交流)**
森口祐介 (京都大学文学研究科・学振特別研究員)
チンパンジーにおける注意と行動の抑制能力とその発達についての国際学会での発表
ドイツ
2007年8月20日～8月24日
- 事業番号 46, 派遣 (共同研究)**
小田亮 (名古屋工業大学つくり領域・准教授)
サバンナヒヒのメスの繁殖同期の解明
アメリカ
2007年12月11日～12月17日
- 事業番号 47, 派遣 (若手交流)**
山本真也 (京大霊長類研・院生 DC)
チンパンジーにおける互惠的利他行動と他者理解の比較認知科学的検討
カナダ, アメリカ
2007年8月14日～8月30日
- 事業番号 48, 派遣 (共同研究)**
橋本千絵 (京大霊長類研・助教)
野生チンパンジーのメスの発情による行動変化について
ウガンダ
2007年9月15日～9月30日

事業番号 49, 派遣 (共同研究)

古市剛史 (京大霊長類研・教授)
野生ボノボの保護に関する国際ワークショップに参加
2008年3月10日～3月18日
コンゴ民主共和国

事業番号 50, 派遣 (共同研究)

濱田穰 (京大霊長類研・准教授)
インド北東部ラーマプートラ河中流域における霊長類の分布と生物学的特長
インド, タイ
2007年10月11日～11月11日

事業番号 51, 派遣 (共同研究)

木村順平 (日本大学生物資源科学部・准教授)
センザンコウの泌尿生殖器及び消化器に関する比較解剖学的研究
ベトナム, タイ
2008年1月4日～1月11日

事業番号 52, 派遣 (共同研究)

島田将喜 (滋賀県立大学人間文化研究科・学振特別研究員 PD)
国際遊び学会の口頭・ポスター発表と N.Y.ブロンクス動物園のニシローランドゴリラのこどもの遊びの観察
アメリカ
2007年4月17日～5月2日

事業番号 53, 派遣 (若手長期派遣)

福島美和 (京大霊長類研・大学院生 DC)
学習障害児における認知機能の国際比較研究
アメリカ
2007年10月25日～2008年1月26日

事業番号 54, 派遣 (共同研究)

中村美知夫 (京都大学理学研究科・助教)
チンパンジーの文化に関する共同プロジェクト 2
ドイツ
2007年10月12日～10月17日

事業番号 55, 派遣 (共同研究)

古市剛史 (京大霊長類研・教授)
チンパンジーの行動の文化的変異に関する研究
ドイツ
2007年10月12日～10月17日

事業番号 56, 派遣 (共同研究)

半谷吾郎 (京大霊長類研・准教授)
ダナムバレー森林保護区の霊長類の群集生態学
マレーシア
2007年11月28日～12月8日
2007年12月18日～2008年1月2日
2008年2月16日～2月24日

事業番号 57, 派遣 (若手長期派遣)

三浦優生 (京大霊長類研・大学院生 DC)

ヒト, チンパンジー, ニホンザルにおける絵画的奥行き知覚: 選好リーチング課題を用いて
ドイツ
2007年12月10日～2008年3月3日

事業番号 58, 招聘

Stephen Ross (リンカーンパーク動物園・職員)
HOPE シンポジウム 2007 にて講演
アメリカ
2006年11月14日～11月23日

事業番号 59, 招聘

Maria Finnigan (ウェスタンブレインズ動物園・職員)
HOPE シンポジウム 2007 にて講演
オーストラリア
2007年11月16日～11月20日

事業番号 60, 招聘

Roscoe Stanyon (フローレンス大学・教授)
HOPE シンポジウム 2007 にて講演
イタリア
2007年11月11日～11月21日

事業番号 61, 招聘

Ulrich Reichard (南イリノイ大学・助教)
HOPE シンポジウム 2007 にて講演
アメリカ
2007年11月15日～11月21日

事業番号 62, 招聘

Alan Mootnick (テナガザル保全センター・園長)
HOPE シンポジウム 2007 にて講演
アメリカ
2007年11月8日～11月20日

事業番号 63, 招聘

Linda Brent (チンプヘブン・職員)
HOPE シンポジウム 2007 にて講演
アメリカ
2007年11月14日～11月23日

事業番号 64, 派遣 (共同研究)

田代靖子 (林原生物化学研究所・研究員)
飼育ボノボにおける社会的行動の機能と発達に関する研究
コンゴ民主共和国
2007年12月21日～2008年1月17日

事業番号 65, 派遣 (共同研究)

高井正成 (京大霊長類研・教授)
中国南部の洞窟から見つかった鮮新世～更新世前半の霊長類化石の解析
中国
2008年1月11日～1月17日

(文責: 橋本千絵)